



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

「英語学演習I」における実践的音声指導の授業研究
:
旧くて新しいもの:英語音声教育における不易なもの

メタデータ	言語: ja 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 太一郎, Minami, Taichiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5398

「英語学演習 I」における実践的音声指導の授業研究

—旧くて新しいもの：英語音声教育における不易なもの—

南 太一郎*

A Class-Work Study of the Practical Phonetic Teaching in “English Linguistics Seminar I” —Old and New As Well : What Still Counts in the Teaching of English Pronunciation—

Taichiro MINAMI

I. はじめに

本稿の目的は、平成20年度からのカリキュラム改正に伴い、それまで教員養成課程中学校教育コース英語専攻の必修科目であった「英語音声学 I」及び「英語音声学 II」に代わって新たに開講された「英語学演習 I」という半期週2回の集中訓練コースの趣をもった科目においてどのような内容が教授・学習されてきたかその中身を点検することである。

平成28年度に学部改組の計画が目下進行中であり、その流れの中で現行カリキュラムにおいて実施されている「英語学演習 I」の授業形態や内容に大きな変更が生ずる可能性があるため、この際これまでの当該科目における英語音声の指導内容等を総括しておくことは決して意味のないことではないと思われる。又、教員養成系の英語教師としての現筆者の残り時間もそろそろ終わりが見えてきた今、上記の検討過程を経て「旧くて新しい」英語音声教育に関する問題点を筆者なりに総括することは、一般に対して何らかの参考事例を供することにはなるであろう。

II. 「英語学演習 I」の趣旨と概括的内容

先ず「英語学演習 I」の授業計画を具体的なシラバスを引いて観てみる。表1は学務システムに掲載するための共通フォーマットに書かれた平成20年度のシラバスで、表2のシラバスは、担当教員が平成21年度4月の授業開始時に受講学生に配布するために実際の授業日に割り振った形で作成した具体的シラバス (working syllabus) である。基本的に両者に大きな違いはないが、フォーマットの違いと実際に配布された形のシラバスを参考として提示するため、重複を厭わず掲出した。後述するように、表1や表2の開設当初のシラバスとその後のものとは内容的に異同があるが、それは多少授業の趣旨に変化が生じた結果であり、基本は大きくは変わっていない。

表1や表2のシラバスが示していることは、科目名は「英語学演習」とはなっているものの、当初からこの科目が文字に頼ることを極力排した口頭音声練習を主眼に置いた実践的訓練を目

* 宮崎大学教育文化学部

指していた点である（授業概要中にある以下の文言参照：「文字に頼らず音声のみでやり取りが出来ることを目指して、文法構造や語彙・表現等を定着させる転換練習や代入練習といった基礎練習を積み重ね、英語口頭表現能力の涵養を図る。」）。高度な英語学的素養も教員としては持っていることが望ましいが、最近のオーラルコミュニケーション主体の教科内容に照らしてみただけの場合、如何にも学生達は英語を口頭で使うということに不慣れであり、授業時間構成も折角週2回の集中訓練が可能な形になっていることでもあるので、文字に頼らず耳から聴いた情報を基にした伝達言語としての口頭英語の練習時間を確保することを主眼に置いて音声技能習得を目指す試みを意図したわけである（因みに、「英語学演習Ⅰ」の旧カリキュラムにおける先行科目であった「英語音声学Ⅰ及びⅡ」をこういう形に模様替えることになった担当者の判断理由は、近年の学生の大学入学時から2年生に掛けての英語力から観ると、「学」を講じる前あるいはそれと並行して改めて技能としての口頭英語運用能力を訓練する必要があるのではないか、というものであった）。

それと同時に、将来における中学校或いは高等学校の英語教員としては、英語を操る技能には長けていたとしても、英語音声に関する専門的知識が皆無であれば決して適切な学生・生徒への音声指導は望めないのも又事実であるので、授業計画の後半では専門的な学的内容を伴った教材を追加学習することにより、一通りの英語音声学的概念知識も得られるように配慮したカリキュラム構成にした。

表1 平成20年度学務システム掲載共通フォーマット記載のシラバス

授業科目名： 英語学演習Ⅰ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 南 太一郎
科 目	教科に関する科目		
各科目に含めることが必要な事項			
<p>授業の到達目標及びテーマ：</p> <p>以下のテーマを学習することを通して、中学校1種及び高等学校1種（英語）を十全に教授するために必要な英語学的素養を身に付けさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文字に頼らず音声のみでやり取りが出来ることを目指して、文法構造や語彙・表現等を定着させる転換練習や代入練習といった基礎練習を積み重ね、英語口頭表現能力の涵養を図る。 ・英語音声の基本的特徴を、理論も含め、母音・子音から強勢・アクセント・話調等の調律特徴まで含めて過不足なく訓練し、英語によるコミュニケーション能力の基礎を習得させる。 			
<p>授業の概要：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) <i>The New Intensive Course in English, Intermediate Part 1</i> の音声教材の各種練習を、順次レッスン毎に耳だけによってそつなく捌けることを目指して反復練習する。 2) 英語音声学の基礎・基本を、理論に基づいて発音練習すると共に、具体音の蓄積から美しい英語音韻体系の内在化を図る筋道を付ける。 			
<p>授業計画：The New ICE のテーブルによる音声訓練と一層理論的な部分も含めた音声学的訓練を実施して、只管声を出し、転換練習等をこなし、音声の「千本ノック」でヘトヘトになるまで絞り上げる。</p> <p>第1回： Course Introduction & Guidance</p> <p>第2回： <i>The New Intensive Course in English, Intermediate Part 1</i>: Lesson 1</p> <p>第3回： Lesson 2</p> <p>第4回： Lesson 3; Lesson 4</p>			

第5回：Review and some more practice
第6回：Lesson 5；Lesson 6
第7回：Lesson 7；Lesson 8
第8回：Lesson 9；Lesson 10
第9回：Review and some more practice
第10回：Lesson 11；Lesson 12
第11回：Lesson 13；Lesson 14
第12回：Lesson 15；Lesson 16
第13回：Review and some more practice
第14回：Lesson 17；Lesson 18
第15回：Lesson 19；Lesson 20
第16回：Review and some more practice
第17回： <i>Accurate English: A Complete Course in Pronunciation</i> : Ch. 1 "Intro"
第18回：Ch. 2 "The Phonetic Alphabet"
第19回：Ch. 3 "Vowel Overview"
第20回：Ch. 3 "Vowel Overview"(contind.)
第21回：Ch. 12 "Consonant Overview"
第22回：Ch. 12 "Consonant Overview"(contind.)
第23回：Ch. 6 "Stress"；Ch. 7 "Stress(Advanced)"
第24回：Ch. 8 "Rhythm"；Ch. 9 "Rhythm(Advanced)"
第25回：Ch. 11 "Review of Stress and Rhythm"
第26回：Ch 13 "Differences between Voiced and Voiceless Consonants"；Ch. 14 "<ed> and <s> Endings"
第27回：Ch. 16 "Intonation"
第28回：Ch. 16 "Intonation"(contind.)
第29回：課題録音
第30回：課題録音

テキスト：

- 1) ELS, *The New Intensive Course in English, Intermediate Part 1* (テープ教材のみ使用)
- 2) Rebecca M. Dauer, *Accurate English: A Complete Course in Pronunciation* (Prentice Hall)

参考書：

- 1) Ann Cook, *American Accent Training, 2nd Ed* (Barron's Educational) w/ 5 CDs
- 2) Or a comparable textbook or textbooks either in English or in Japanese.

学生に対する評価：

- 1) 出席は大前提（出席していても評価点には加えないが、欠席はマイナス評価の対象とする）
- 2) 最終音声教材録音による英語発音達成度を評価する・・・100%（但し、学期途中に課題を課した場合は、それも考慮して全体評価する。）

表2 平成21年度授業開始時配布のシラバス
平成21年度 中学校英語主専攻【英語学演習Ⅰ】科目シラバス (担当：南 太一郎)

	教科書 1	教科書 2
第1回 4/10 (金)	本授業の進め方、英語の勉強法他、概論 (Introduction)	
第2回 4/13 (月)	<i>The New Intensive Course in English, Intermediate</i> <u>Part 1</u> : Lesson 1	
第3回 4/17 (金)	Lesson 2	
第4回 4/20 (月)	Lesson 3 ; Lesson 4	
第5回 4/24 (金)	Review and some more practice	
第6回 4/27 (月)	Lesson 5 ; Lesson 6	
第7回 5/1 (金)	Lesson 7 ; Lesson 8	
第8回 5/8 (金)	Lesson 9 : Lesson 10	
第9回 5/11 (月)	Review and some more practice	
第10回 5/15 (金)	Lesson 11 ; Lesson 12	
第11回 5/18 (月)	Lesson 13 ; Lesson 14	
第12回 5/22 (金)	Lesson 15 ; Lesson 16	
第13回 5/25 (月)	Review and some more practice	
第14回 5/29 (金)	Lesson 17 ; Lesson 18	
第15回 6/1 (月)	Lesson 19 ; Lesson 20	
第16回 6/5 (金)	Review and some more practice	
第17回 6/8 (月)		<i>Accurate English: A Complete Course in</i> <u>Pronunciation</u> : Ch. 1 "Intro"

第 18 回 6/12 (金)		Ch. 2 “The Phonetic Alphabet”
第 19 回 6/15 (月)		Ch. 3 “Vowel Overview”
第 20 回 6/19 (金)		Ch. 3 “Vowel Overview”(contind.)
第 21 回 6/22 (月)		Ch. 12 “Consonant Overview”
第 22 回 6/26 (金)		Ch. 12 “Consonant Overview”(contind.)
第 23 回 6/29 (月)		Ch. 6 “Stress”; Ch. 7 “Stress(Advanced)”
第 24 回 7/3 (金)		Ch. 8 “Rhythm” ; Ch. 9 “Rhythm(Advanced)”
第 25 回 7/6 (月)		Ch .11 “Review of Stress and Rhythm”
第 26 回 7/10 (金)		Ch 13 “Differences between Voiced and Voiceless Consonants”; Ch. 14 “<ed> and <s> Endings”
第 27 回 7/13 (月)		Ch. 16 “Intonation”
第 28 回 7/16 (木)		Ch. 16 “Intonation”(contind.)
第 29 回 7/31 (金)	「課題録音」乃至は「総まとめ授業」	
第 30 回 8/3 (月)	「課題録音」乃至は「総まとめ授業」	

- ・ 授業の概要：文字に頼らず音声のみでやり取りが出来ることを目指して、文法構造や語彙・表現等を定着させる転換練習や代入練習といった基礎練習を積み重ね、英語口頭表現能力の涵養を図る。英語音声の基本的特徴を、理論も含め、母音・子音から強勢・アクセント・話調等の調律特徴まで含めて過不足なく訓練し、英語によるコミュニケーション能力の基礎を習得させる。
 - 1) *The New Intensive Course in English, Intermediate Part 1* の音声教材の各種練習を、順次レッスン毎に耳だけによってそつなく捌けることを目指して反復練習する。
 - 2) 英語音声学の基礎・基本を、理論に基づいて発音練習すると共に、具体音の蓄積から美しい英語音韻体系の内在化を図る筋道を付ける。*The New ICE* のテープによる音声訓練と一層理論的な部分も含めた音声学的訓練を実施して、只管声を出し、転換練習等をこなし、音声の「千本ノック」でヘトヘトになるまで絞り上げる。
- ・ テキスト： 1) *ELS, The New Intensive Course in English, Intermediate Part 1* (テープ教材のみ使用)
 ★但し、教材本文等の書き取りも実施するので、この授業用のノートを一冊以上用意すること。

- 2) Rebecca M. Dauer, *Accurate English : A Complete Course in Pronunciation* (Prentice Hall)
[今の処必要に合わせてプリントで対応する。]

- ・推薦参考書：1) Ann Cook, *American Accent Training, 2nd Ed* (Barron's Educational) w/5 CDs ;
2) Or a comparable textbook or textbooks either in English or in Japanese.

平成22年度までは基本的な上記のようなシラバス内容が踏襲されるが、学期後半の英語音声学の基礎・基本の修得に関するテキストをR. M. Dauerの*Accurate English : A Complete Course in Pronunciation*のプリント教材から、中学校での教室指導をより一層意識した形の鳥居次好・兼子尚道『英語発音の指導』に変更し、全12章を各1回毎に割り振って解説と練習を行なう形にした。

平成23年度には、前半は文字に頼らない音声訓練、後半はより専門的な英語音声学的理解と練習という枠組みを大きく変更はしないものの、前半のテキストを更にパターン練習の色彩の強いもの(『NHK続基礎英語 英語の文型と文法』の本文及び転換練習部分を毎回2レッスン(以上)ずつ口頭練習した上で、ディクテーションで書き取り、その上で文字と音声を結びつけて確認練習を行なう)に差し替え、これと並行的にDauerの前掲書のPrefaceからChapter 2 (The Phonetic Alphabet) までを順次音源を参照しつつ読みながら文字と発音記号の対応の基本を再確認した上で、鳥居・兼子著の上掲本に繋ぐという方法を採用した。

平成24年度に至って、当初からの上記の構成は修正されることになるが、その修正点の眼目は、文字に頼らない耳からの口頭音声訓練の趣旨は活かしつつも、テキストを日常会話的表現や英語文のパターン練習を主眼とするものからより一層音声学的内容を含む練習教材に代えたことである。具体的には以下の様な概要とテキストへの変更を行なった。

・授業の概要：

基本的な英語音声に関する事項のうち主に強勢・アクセント、リズム・話調等の prosodic features (韻律特徴) について、英語音源の解説を聴きつつ種々の概念の確認を行ない、それと同時に各レッスンに組み込まれた発音練習を耳と口を働かせて行なう実践的授業である(テキストの1)。

更に、母音・子音等の文節音(音素: segmentals)を含む、理論的な概念把握を通じて、将来英語音声の指導を行なうための基礎的事項を順次練習・学習して行く。これらを通して、所謂、英語によるコミュニケーション能力の基礎の習得を図る。(テキストの2及び3)

- 1) 『VOA Special English : Time and Tune in English Speech』の英語音源の解説を聴きながら、種々の音声学的概念の確認を行ない、同時に各レッスンに組み込まれた実践的発音練習を行なう。原則一回に2レッスンの進捗とし、状況次第で弾力的に進める。
- 2) Rebecca M. Dauer, *Accurate English : A Complete Course in Pronunciation* (Prentice Hall)のPreface~Chapter 2 (The Phonetic Alphabet) までを順次読みながら文字と発音記号の対応の基本を再確認する。
- 3) 更に、その後は『英語発音の指導』(大修館書店)を用いて、最近の理論的部分も補いつつ、自らの英語発音に対する客観的再認識と発音指導の方法に関して順次学んで行く。分担を決め、模擬授業のような発表形式にすることも考えている。

・テキスト：

- 1) 『VOA Special English : Time and Tune in English Speech』(プリント教材)
- 2) *Accurate English : A Complete Course in Pronunciation* (プリント教材)
- 3) 鳥居次好・兼子尚道『英語発音の指導』(大修館書店)

この変更の趣旨は、英語の音声特徴、中でも英語らしい音声表現に直結する要素である調律[韻律]特徴について、英語による口頭説明に基づいた豊富な練習を可能とする教材を用いることで、一般的英語の運用練習（パタン練習等）の要素は多少減らしても、英語の音声的特徴の習得訓練との一挙両得に一層の照準を合わせた授業展開を目指すということであった。詰まり、数年の試行錯誤を経て、週2回の集中訓練科目という枠組みの中で、音声学的概念把握と実践練習の総時間をできるだけ多く確保する必要性に改めて思い至ったということである。

平成25年度及び26年度も引き続き上記の趣旨で授業構成を行ない実施した。但し、変更点は後半の英語音声学テキストを、牧野武彦『日本人のための英語音声学レッスン』（平成25年度）と竹林滋・清水あつ子・斎藤弘子『改訂新版 初級英語音声学』（平成26年度）にそれぞれ変えたことであった。

Ⅲ. 教材寸評と総括

1) 『VOA Special English : Time and Tune in English Speech』（プリント教材）

これは、元々1960年代にアメリカ国防省が制作したものをVOA（Voice of America）が英語の非母語話者聴取者を想定して放送した語学教材で、その後1968年にレコードが発売されNHK-FMでも放送されたようである。又、その後も新たにテキスト化されている（高木信之編著『英語のリズムとイントネーション 再入門ワークショップ』（松柏社、1996））。現筆者もこの教材を元に1ページに各レッスンのスキットと音声練習部分を抜き出した独自のプリント教材を作成し授業テキストとして使用してきている。オリジナル音源は作成年代から云って、録音状態も悪く雑音が多かったりスキットで取り上げられている話題や表現等にも時代性が色濃く反映して今ではかなり古いという印象を与えはする。しかしながら、扱われている音声事項やその練習量の豊富さの点で現在では類似の教材も皆無に等しく、他と比べて全く今でも遜色のないものだと断言できる。

授業時には、1回に大体2レッスンを扱い、reviewも含めて全部で25課を12~13回程度で終えるよう段取りをしている。授業方法は、附属の音源で米人男性教師と女性アシスタントとの間で交わされる調律特徴（Time＝強勢とリズム；Tune＝イントネーション）に関する英語での説明の遣り取りを聴き取って理解し、それに基づく練習を逐次行なってゆくものだが、当然概念的な説明は素人向きの用語を用いてなされてはいるものの英語で行なわれるので、学生に要点が聴き取れているかどうかを随時チェックしながら、音声学の術語も援用しつつ補足的説明を加えて進めてゆくことにしている。

例えば、冒頭の課で出て来る”stressed syllables”や”unstressed syllables”、“the rhythm stresses”と”the strong stress”、或いは続く第2課で説明される”degrees or levels of stress”に絡んだ”strong/medium/light”といった強勢3段階説に基づく用語や概念区別は素人向けである分追加説明を要する。また、これらの概念は実は強勢だけに関わるのではなく、音の高さ（pitch）の変化を伴う音調核（nucleus tone）の来る音節やピッチの変化方向（pitch change or movement）といったイントネーションも含めた「アクセント」（the accent of English）の理解と体得を求めている事項であり、それが英語らしいリズムとも不可分の関係にあることがレッスンの冒頭から示されるのであるから、教員養成系大学での授業としてはその辺りをしっかりと補足説明する必要のある重要概念でもある。

レッスンの構成は、2課以降は冒頭の復習から当該のレッスンで取り扱う事項への導入、或いは、最後の纏めと次回への予告・橋渡しに至るまで実に鮮やかに組み立てられ、毎回その課で何を学習し何を修得すべきかが明快に示されていて実に完成度の高い教材であると云えるであろう。この辺りの機微は解説部分を文字起こしして示さなければ分かり辛いのであるがそれは紙数の都合で割愛せざるを得ない。その代わり、独自作成テキストの雛形的1レッスン分を図1に後掲し、各レッスンで学習する音声事項を見出しとして以下の表3に示しておく。

表3 『VOA Special English : Time and Tune in English Speech』各課の構成

Lesson 1	What Is Time and Tune? Basic Practice (1)	Lesson 14	Tune for Choice Questions
Lesson 2	Basic Practice (2): 2-3-1 Tune for Statements 2-3 Rising Tune for Yes-No Questions	Lesson 15	Reviews and Further Practice of Lessons 10 to 14
Lesson 3	2-3-1 Tune for Information Questions	Lesson 16	Stress Patterns for Adjective-Noun Combinations
Lesson 4	Review and Further Practice of Lessons 1, 2 and 3	Lesson 17	Pronunciation of Unstressed Prepositions and Articles
Lesson 5	Pronunciation of Vowels in Unstressed Syllables	Lesson 18	Stress Pattern for Two-Part Verbs(Type 1)
Lesson 6	How You Keep Time in Speaking English	Lesson 19	Stress Pattern for Two-Part Verbs(Type 2)
Lesson 7	Contraction (1)	Lesson 20	Stress Pattern for Two-Part Nouns
Lesson 8	Contraction (2)	Lesson 21	Reviews and Further Practice of Lessons 16 to 20
Lesson 9	Review and Further Practice of Lessons 5 to 8	Lesson 22	Strong Stress for Emphasis and Contrast (1)
Lesson 10	Non-Final Tunes (2-3-2 and 2-3-3)	Lesson 23	Strong Stress for Emphasis and Contrast (2)
Lesson 11	Review and Further Practice of the Non-Final Tunes	Lesson 24	Grand Review (1) - Tunes
Lesson 12	Tag Questions that Expect a Yes-Answer	Lesson 25	Grand Review (2) - Stress Patterns
Lesson 13	Tag Questions that Expect a No-Answer		

2) Rebecca M. Dauer, *Accurate English : A Complete Course in Pronunciation*. Regents/Prentice Hall; 1993

これはアメリカ英語の発音教本としては未だに出色のものだと高く評価できるものであり、かつて「英語音声学」という授業で、このテキストを単体で使用したことも数回ある。アメリカ英語の音声を包括的に取扱い、練習量も附属のテープ教材の分量も比較的多くその模範的発音の程度も高いと現筆者は判断している。この録音音源としての出来の佳さ故に、後述す

VOA Special English: *Time and Tune in English Speech*

Lesson 1

What Is Time and Tune? Basic Practice (1)

CONVERSATION 1: BREAKFAST TABLE

Carol : **Some more coffee, dear?**
Tony : **Yes, please.**
 Thank you. Are you planning a busy day?
Carol : **Yes. I'm going to do some baking this morning.**
Tony : **You're going to do some baking?**
Carol : **Um-Hmmm, I think I'll make a chocolate cake.**
Tony : **Good.**
Carol : **I have to go shopping, too. Is there anything you want?**
Tony : **I don't think so. Oh, by the way, I'll be a little late for dinner. There's a meeting at four-thirty.**
Carol : **That's all right. Oh, Tony, look at the time. You said you had a nine o'clock class.**
Tony : **So I do. I've got to go! Would you like me to mail these letters for you?**
Carol : **Yes, please. Goodbye, dear. Have a nice day.**
Tony : **Goodbye, darling. (Kisses her.) See you this evening.**

<Practice>

-Time- (Rhythm)

1. Look at the time.
2. I'm going to do some baking this morning.

-Tune- (Intonation)

1. I'd like to da-da-da 2-3-1 I'd like to
2. I'm going to do some baking this morning.
3. You said you had a nine o'clock class.
4. I don't think so.
5. Look at the time.
6. I think I'll make a chocolate cake.
7. I'll be a little late for dinner. I've got to go.

図1 VOA Special English: Time and Tune in English Speech, Lesson 1

る様に「英語学演習Ⅰ」の授業最終評価のための発音診断録音用教材にも指定している。このテキストの最大の特徴は、イギリス音声学の伝統、なかんずくD. Abercrombie, J. C. Catford, P. Ladefogedといったエディンバラ大学の流れを汲む実践的発音練習法を下敷きにして、特にこのテキストが「TO DO」という実際の各音の調音練習において強調する“silent practice”という手法は、J. C. Catfordが理論書の*Fundamental Problems in Phonetics* (1977)に基づいて著わした実用的応用書とも云える*A Practical Introduction to Phonetics* (1988; 2001²)で、読者に強く勧めているkinaesthetic sensationsに基づくintrospective awarenessを磨くための自己の調音器官を用いた「実験」(“experiments”)において推奨している方法そのものである。これは、通常の発音練習でやるように声を伴って調音活動を行なうと、発音された音によって口腔内の筋肉の動きに向かうべき発話者の意識が遮蔽(masking)されて運動感覚的フィードバック作用が難しくなるという点を効果的に補正・矯正する手法であり、教育的にも極めて有効なものである。強いてテキストとしての難点を云うならば、発音記号が国際音声学協会のIPA発音表記記号に準拠してはいるものの、アメリカの学者の通例に漏れず本来一音一記号のIPAの原則に反して、弱母音/a/を強音節に顕れる[ʌ]の代用としても用いている点、及び母音の長音符号([:])を用いていない点他幾つかの記号の使い方が日本での慣用と異なっていて学習者をまごつかせること位が挙げられるが、これは附属音源と記号の対照を行ないつつ補足説明を加えれば特に大きな問題を生じさせるものではない。

上記のような特徴を持った良質の教材ではあるが、当然ながら全編英語で書かれており、練習量も豊富な分かつて単体で使用した際も1冊を全てカバーすることはできなかった。又、理論に基づいてはいるものの、音声学書と云うよりは発音教本(a course book/manual)であるため、学生が将来教場で専門的知識を踏まえた教育ができるためにはより一層専門的な概念的補足を多く必要とする嫌いもあるかも知れない。そこで、近年の本授業では、特に序論と発音記号を扱った第2章までをプリント教材として用い、一通りの記号と音との対応を粗々確認しつつ練習し、より音声学的中身を備えたその後のテキストへの橋渡しとして使ってきている。

3) 鳥居次好・兼子尚道『英語発音の指導』(大修館書店)

この教材は、出版年こそ古いものの(初版は1969年)、同著者達の『英語の発音—研究と指導—』(初版1962年; 第7版1972年)の研究編に基づき、当時の学問的レベルをしっかりと踏まえた解説と教室で実際にテープ教材を使うことを想定した台本部分から成っていて、英語母語話者(カナダ人女性)の各音発音時の顔の前面と側面からの口形写真(60枚)及び著者の一人(兼子)が自らを被写体にして撮ったレントゲン写真に基づくトレース図(44枚)を随所に掲げて各音の調音点や調音位置を示している点も他に類を見ない得がたいテキストである(当時としては被爆の危険もある中、著者自身がこれだけ多くの自己を被写体にしてX線写真を撮って提供している例はなく、その意味でも上記理論編共々未だにその価値が色褪せていないことは強調してもし過ぎることはない)。がしかし、音によっては(舌の位置を確定するために上下前歯の咬合点を中心に交叉する2本の縦横の軸を交点として客観的基準ポイントを設定していること、口腔内に不自然な鎖状の異物等を挿入し舌の上に乗せて発音するというのではなくバリウム造影剤を用いて撮影していること、従ってJones等が云うような舌の正中溝が真の舌の高さではなく舌背面(峰の線)がそうであること等を明らかにしている点は画期的であるが、著者が実際どれだけ母語話者に近い英語発音をしていたかが必ずしも明確ではないこともあるため)

音によってはトレース図の正確さに若干の疑問が残る場合もあり、音声記述によっては部分的にその後の種々の研究が反映されていない憾みが残る部分もある。そのため、その点を教授者が修正・補足することでその時代性の限界を補って使用する必要があるだろう。

本書のもう一つの特徴は、上記の通り実際に教室やクラブ活動等でもそのまま練習ができるように、録音内容を反映したスクリプトが各章の末尾に枠組みで付けられていることであり、又、他書が通常解説を母音から始めて子音（或いはその逆で子音から始めて母音）、次に強勢、リズム、イントネーション（音素論における音調曲線（intonation contour）が用いられている）という風に調律特徴へと事項別に進める構成になることが多い中、このテキストは母音と子音（著者らの術語で「分節音素」Segmental phoneme）と調律特徴（著者らの術語で「かぶせ音素」Suprasegmental phoneme）は、理論的には分けられるが実際には共起するので、易から難へという配列を基本に個々の音の練習と同時にStress、Intonation、Rhythm等の練習も行なうという構成になっていて、それは一つの教育的達見であろう。

素材として取り上げられている語句や英文は昭和44（1969）年当時の学習指導要領に準拠した中学校教科書から採られている。現行の教科書と比べるとやや程度の高い語も含まれているであろうが、大学生の練習教材として不足はない訳で、却って易きにつき過ぎず先に繋がるという意味で好都合でもあろう。全12章に亘って上記の「分節音素」と「かぶせ音素」を取り扱っているが、各章の分量は決して多くはなく、必須事項を中心にコンパクトに纏められている。

只、強いて難点を挙げれば、大学生向きとしては練習量がやや少ない点と、音源の日本語ナレーションが今となってはやや古風な言い回しが頻発するため、如何にも古いという印象が拭えないことであろうか。しかし、当時の日本人の物言いという別の面では参考になる部分もあり、学生達がまま感じるかもしれないアナクロ感を除けば、これは本質的瑕疵とは云えないであろう。

それにも拘わらず、ここ2年は違う教材を用いているが、その理由は、より最近の知見を含んでいてCD音源も附属しているという教材が近年は幾つか出版されているので、それらを順次試験的に使ってみるという意味合いで教材を変更しているものである。それぞれに特徴があり、簡単に甲乙を付けたいが、総じて『英語発音の指導』と比べれば当然ながら記述がより専門的であり、概念把握という点では新知見等も含まれて便利ではある。但し、調音点や調音様式の記述や図の中には未だに修正を必要とする個所が残っていたり、附属のCD音源で提供されている発音の中には、母語話者の発音であっても発話者に音声学の知識や求められている教育的意図への理解が欠けていて些か問題だとせざるを得ない個所も散見され、特に国内で市販されている英語音声学の音声教材の仕上がりの難点は未だに解消はされていないことの方が多いと云わざるを得ない。

これを要するに、純粋学問的観点からすれば、現筆者の用いている教科書はかなり時代掛かっているとの批判もあり得るであろう。しかし、ここで敢えて強調しておきたいことは、過去30年以上教職に携わり様々なテキストを用いて英語の発音を教えてきた結果として、振り返って考えると、旧いものが必ずしも全て乗り越えられて後の時代では使い物にならないという訳ではなく、特に英語音声の訓練教材として観た場合、古く構造言語学時代の音素論華やかなりし頃にその理論的枠組みに基づいて開発された教材やその遙か以前から連綿と続いている実学的英国の音声学研究と実践の伝統に連なる方法論を下敷きにして作られている教材は色褪せない良さや利点を備えている、ということである。

IV. おわりに

本稿では「英語学演習Ⅰ」の授業内容をシラバスの趣旨や変遷、使用テキストの評価等を通じて検討した。正直云って、英語音声の教育方法論は導入期のフォニックスやジャズチャンツ的な興味を持たせようとする教材開発を除き、ある意味飽和状態ではないかと長い間考えてきた。新しい時代には新しい方法論や教材が求められるということは理解できるが、だからといって方法論も教材も何もかも新しくなければ時代の流れに対応できないのかどうか、判断と見極めは難しくもあり又容易でもあると云える気がする。対象学生の意識や好みが変わってきているのだから、学習者が飽きない教材、興味を繋げる教材が時代の空気のようなあやふやな要請とそれを承けて商業ベースで出版社によって開発されることに不都合はない筈ではないか、と云われるだろう。しかし、『聖書』の言葉を引くまでもなく「日の下には新しき者あらざるなり」(傳道之書 1:9)なのであって、少なくとも英語の音声教育においてはパラダイムシフトと云えるような根本的方法論の修正は1950年代以降確認されないと云って過言ではないと長年の教師としての勘は語りかけてくる。デジタル機器の教育への応用ということは、ある意味新機軸と云えるものかも知れない。しかし、それですら、絶対なければ教育効果が極端に上がらないという魔法の杖では、ない。「目新しい」とは云い得て妙な言葉ではないだろうか。蕉風の俳句を表す言葉に「不易と流行」というのがあるが、英語音声教育でこの「不易」に繋がるものは何であろうか？

教えるべきこと・習得すべき音声スキルは以前から変更なく決まっているものである。それは簡単に言えば英語を言語として成り立たせている音声の特徴であり、英語の母音、半母音、子音、強勢(アクセント)、リズム、話調(イントネーション)等々の基本概念から為る。そして、それらを修得するには、諸要素を身体に染み込ませる運動感覚的内省を援用した物量的な徹底的訓練しか手や道はないのである。安直に「聴くだけで喋れるようになる」だの「コンピュータによるモデル発音と音響データとのビジュアル比較を行なってネイティブ並みの発音習得」だの目先の新しさに騙されてはいけないのである。道元禅師の座禅の極意である「只管打坐」をヒントに、故國弘正雄氏は「只管朗読」「只管筆写」という方法論を遙か昔の1970年に名著『英語の話し方』(サイマル出版)の中で提唱されたが、その根本的考え方は基本を押さえたら後はひたすら英文を音読したり筆写したりすることで内在化を図るということである。極めて素朴ながらそれは勉学の捷徑を説く教えであろう。長年英語教育界を先導された故小川芳男氏はある著書の中で「4つの『き』」ということに言及されたが、それらは、曰く「やる気」、曰く「根気」、曰く「暗記」、曰く「年季」の4つである。これが語学学習の必須要件だということである。音声習得にもそのまま当てはまるものではないだろうか。極端なことを言えば、教材は一定以上のレベルのものであれば何でも佳いのであり、その善用を「4つの『き』」によって担保しさえすれば相当のところまでは行けるのである。

このように考えてくれば、我田引水と云われようとも、現筆者が「英語学演習Ⅰ」において用いている方法論と教材にも一定の存在理由は認められる筈であり、教材やそれが基づいた方法論の盛時が単に昔で旧いというだけで排斥されるべきものではないと強く思うものである。これも又教育論では基本的認識の筈であるが、飽くまでも学ぶ主体は学生であり、教師は精々で産婆役でしかない。その学生を興味付け、学習に仕向けるための教材や方法論に新機軸を盛り込むことは悪いことではないが、「やる気」(will, drive, motivation)がなければ「根気」(patience、

endurance、persistence、perseverance) が続かず、暗記 (memorization、rote learning、learning by heart) も捗らない。これでは「年季」(experience、training、apprenticeship) を掛けても成果は上がらず、年季を掛けることの必要性にも遂に目覚めないわけである。

唐代の詩人、劉希夷の詩にある「年年歳歳花相似たり / 歳歳年年人同じからず」を借用して云えば、歳々年々学生は変われども、年々歳々教授すべき内容は変わる訳ではなく、何度失敗したとしても不易な内容を倦まず弛まず訓練して学生に習得(「伝授」という方が相応しい)させて行くことしか教師にはないのではなからうか? 1980年代後半にE. D. Hirsch, Jr. がアメリカの公教育の改革のために提唱した“Cultural Literacy”の概念に基づいて云っても、英語音声学・音声教育の不易なshared background information/knowledgeの修得無しには決してその上の高みは望めないであり、しかし、そこを一歩一歩踏み越えて行きさえすれば遥かな学びの道は次々に開けて行くのであるから。

参考文献

- Abercrombie, David. *Elements of General Phonetics*. Edinburgh Univ. Press, 1967.
Catford, J. C. *Fundamental Problems in Phonetics*. Edinburgh Univ. Press, 1977.
——— *A Practical Introduction to Phonetics*. Oxford Uni. Press, 1988 ; 2001².
Dauer, Rebecca M. *Accurate English : A Complete Course in Pronunciation*. Regents/Prentice Hall, 1993.
Ladefoged, Peter. *A Course in Phonetics, Fifth Ed.* Thomson, 2006.
高木信之編著『英語のリズムとイントネーション 再入門ワークショップ』松柏社, 1996.
鳥居次好・兼子尚道『英語発音の指導』大修館書店, 1969.
——— 『英語の発音 一研究と指導一』大修館書店, 1962 ; 1972⁷.
『VOA Special English : Time and Tune in English Speech』(プリント教材)